

シンガポールドルと金融政策

シンガポールの第二四半期のGDPの速報値はマイナス3.4%だった。市場予想のプラス0.1%より大分悪かった。貿易立国のシンガポールにとって米中貿易戦争をはじめとする世界の保護主義的な動きは悪影響以外何物でもない。しかもそれは想像を超えていた。

こうなるとシンガポールの中央銀行に相当するMAS（シンガポール通貨庁）は政策対応として利下げを考える。だがMASはそうしない。シンガポールの金融政策は為替レートを通して行うからだ。

自由貿易港であるシンガポールは貿易の経済や物価に与える影響が大きく、金融政策の目標を実現するには金利の操作よりも為替相場の管理の方が効果的なのだ。MASはそう考えている。そこで金融を引き締めたいときはシンガポールドルを上昇させ、緩和したいときは下落させる。

それに政策バンド（変動幅）やその傾き、中心レートなどを調整して金融政策の意図を伝える。

実際の為替レートの操作はMASの市場介入によって行う。MASはかつて世界の市場で暴れまくっていた大口のスペキュレーターだったくらいだから、シンガポールドルのような小規模な市場での為替操作などお手のものだ。

MASは4月と10月に定例の政策会議を開くが、10月の会議では政策バンドの傾きを下げるなど通貨下落方向へのシフトが考えられる。事態が差し迫った場合は時期にとらわれず緊急会合もあり得る。

このようにシンガポールの金融政策はユニークだが、同様に貿易立国である香港の場合はどうだろう。

香港では貿易重視のために為替レートの安定を優先した。安定した為替レートで貿易の拡大を計ってきた。安定した為替レート（対米ドルレート）を実現するには資本移動をコントロール必要がある。そのためには米国との金利差があまり広がらないようにしなければならない。あくまで自由な資本移動が前提だ。つまり金利政策は基本的に米国に合わせる、追随する。

香港ドルは変動幅、中心レートが設定され、その幅を超えるような場合はHKMA（香港通貨庁）が市場介入で変動幅を守る。守り切れない場合は中心レートや変動幅の変更をする。

香港ドルはしばらく変動幅の上限あたりで推移していたが、最近は米ドルと香港ドルの金利差の縮小で中心レート近辺まで戻ってきた。

このように両通貨とも他の通貨とは違ったシステムの中で変動するユニークな通貨なのだ。